

この発表は、津村俊夫先生の主題講演への応答という位置づけになっていますが、準備委員会の了承を得て、主題講演で取り上げられた各論点への詳細な応答という形をとるのではなく、主題講演で提起されたおおまかな問題意識を共有しつつ、応答者自身の関心領域や視点を織り込みながら、学問的対話を前進させて行くような発表を目指しています。特に、主題講演者が主に旧約学の立場から問題提起をしておられるのに対して、新約学からの問題提起もしていきたいと思っています。

主題講演の簡易版レジュメでは、聖書釈義が「聖書の究極の著者である神が、人間の著者を通して伝えようと意図された意味を理解するために、忍耐強く聖書テキストに聞き続けること」と定義されています。その意味するところは、聖書のテキストには著者（直接的には人間の聖書記者、究極的には神）によって「意図された意味」が何らかの形で客観的に内在しており、それを文献学的・歴史学的・考古学的その他のあらゆる有効な手法を駆使して正確に取り出すこと（*exegesis*）が釈義の任務である、ということではないかと理解しています。

さらに、このような釈義理解の土台をなしているのは、「書かれたテキストとしての聖書の優位性」ということではないかと思えます。主題講演者にとって、これこそが福音主義聖書観の精髓であり、そこからの当然の帰結として、そのテキストに「忍耐強く聞き続ける」営みとしての釈義の意義づけがなされ、さらにそのためのツールとしての歴史的批評的アプローチやポストモダン解釈学などの有効性が吟味・評価されていく、ということだと思えます。

応答講演では、このような聖書理解・釈義理解を大枠では共有しつつも、現代の聖書学が直面している様々な問題を考慮しつつ、いくつかの提案や問題提起を行っていきたく願っています。その中で特に歴史的・批評的方法とポストモダニズムが聖書釈義に与えた影響を考察し、これらを踏まえた上での福音主義聖書釈義のこれからの進むべき方向性を探っていきたくと思えます。

現時点で応答者の手元にある資料は、主題講演の簡易版レジュメのみですので、この簡易版レジュメもそれに基づいて作成しています。今後津村先生より更に詳しい資料を提供いただけることになっていますので、それによって詳細版レジュメの構成及び内容に多少の変更があるかもしれません。また、30分間という時間的制限により、いくつかのトピックを（重要なものも含め）割愛する必要があると思われる。これらのこととお断りした上で、以下に現時点での暫定的アウトラインを示します。

I. 予備的考察

- A. 福音主義の定義
- B. 福音主義の聖書観
 - i. 靈感
 - ii. 無誤性

II. 福音主義聖書積義の諸問題

A. 聖書積義の定義と課題

- i. 著者・テキスト・読者
- ii. 聖書解釈における過去 (meaning) と現在 (significance)
- iii. 聖書解釈学の一般性と特殊性

B. モダニズムの聖書解釈：歴史的批評的方法

- i. 教義学と聖書学の分離
- ii. 合理主義的理性による聖書解釈
- iii. 聖書の歴史的起源の探求
- iv. 福音主義聖書積義への影響

C. ポストモダニズムの聖書解釈

- i. ポストモダニズムの多様性
- ii. 意味の多元主義的・相対主義的理解
- iii. 解釈における読者の役割
- iv. 福音主義聖書積義への影響

III. 福音主義聖書積義の展望

A. モダニズムとポストモダニズムへの応答

- i. ポスト自由主義 (ポストクリティカル) の聖書解釈
- ii. ポスト保守主義の聖書解釈

B. 神学的積義の可能性

- i. 聖書の主題：神
- ii. 聖書神学と正典的アプローチ
 - a. 物語とドラマ：積義における救済史と終末論の役割
 - b. 予型論
 - c. 「より完全な意味 *sensus plenior*」
- iii. 教会の書としての聖書：積義における信仰共同体の役割

C. 使徒的聖書積義の再考

- i. 新約聖書における旧約聖書の使用
 - a. 間テキスト性
 - b. ギリシア語訳旧約聖書の問題
- ii. イエスと使徒たちの聖書観と積義

IV. おわりに

A. 「福音」主義的聖書積義を目指して

B. 解釈学的謙遜